

聖なる不満をもって生きること
(ピリピ3章10-11節)

導入

今朝、皆さんにお聞きしたいことがあります。あなたは不満を持っていますか。

ほとんどの人が多くの不満を持っていると思います。

例えば、もっときれいになりたい、かっこよくなりた、瘦せたい、もっと頭がよくなりた、お金持ちになりたい、と思っている人はたくさんいます。

もっと大きな家、高級な車、もっといい仕事や配偶者を求める人もいます。

たいていの場合は、不満というのはわがままのあらわれで、神の喜ばれないことです。

クリスチャンは、主が与えられたもので満足すべきです。与えられていないものについても、それを受け入れるべきです。

聖書には、満足することについて多くが記されています。

例えば、ヘブル13:5には、「いま持っているもので満足しなさい。」とあります。

また、多くの人がよく知る聖書箇所、ピリピ4:11は次のように語ります。

私は、自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えたのです。(新共同訳)

他にも、満足について語る聖書箇所はたくさんあります。ですから、私たちが神から与えられたもので満足することを神がお望みであることは明らかです。

しかし、主が望まれない満足というものがあります。

言い換えるなら、主が私たち皆に持つよう望まれる不満というものがあります。

これを、私たちが一般的に持つてしまうわがままな不満と区別して、「聖なる不満」と呼ぶことにしましょう。

今朝は、ピリピ3:10-11から学びますが、その背景を理解するために、まず8-9節を読みましょう。

この箇所には、パウロが人生で一番大切だと考える事柄について記されています。

私の主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている。キリストのゆえに、私はすべてを失ったが、それらのものを、ふん土のように思っている。それは、私がキリストを得るためであり、律法による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基く神からの義を受けて、キリストのうちに[いる者と認められる(新共同訳)]ためである。

この箇所から、パウロはキリストを得られる限り人生に何の不満もなさそうだとと言えるでしょう。

けれども、今日の箇所を読むと、そうではなかったことがわかります。

パウロは、イエス様を知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている、と言った後で、このように記しています。

¹⁰ 私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、¹¹ どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。

I. 使徒パウロは、聖なる不満を持っていた。

パウロは、イエス・キリストを知ることがこの世でもっとも大切なことであると強調したうえで、10節では、「私の主キリスト・イエスを知る」とはどういうことかを具体的に説明します。

II. パウロが心から知りたいことと経験したいこと

A. 「私は、キリストを知りたいのです」

10節でまずパウロが語ったのは、「キリストを知りたい」という点です。
パウロがピリピ3章で使った「知る」と訳されたギリシャ語の単語は、何かを深く知ることを意味します。

誰かや何かを自分自身の経験によって、そして心で知ることで。

皆さんもご存じのとおり、信仰によってイエス・キリストを自分の主であり救い主と知った人たちがクリスチャンです。

知識を積んだり、洗礼などの儀式を守ったりしても、神の子であるクリスチャンにはなれません。

ですから、キリストを知ることが何よりも大切なことだとパウロが言う際、**新しく生まれること**(「生まれ変わる」ではない)、そしてイエス・キリストを信じる信仰によって神の子となることを指していたのです。

けれども、パウロはキリストをただ知るだけでは満足しませんでした。それは、挨拶を交わす程度のちょっとした知り合いのようなものだからです。

キリストと歩み始めたパウロは、イエスが望まれるこれ以上もない深い交わりを求めました。

イエスをもっともっと深く知りたいとパウロは願ったのです。

皆さんはどうでしょう。皆さんが一番深く親しい絆で結ばれているのは誰ですか。

誰のことを一番よく理解しているでしょう。

それがここでパウロが言おうとしていることだと思います。

パウロは、イエスの喜ばれることを喜び、イエスの悲しまれることを悲しみ、イエスの憤られることに憤りを感じるほど深くイエスを知りたいと願いました。

キリストの心に満ちている愛とあわれみで自分も満たされたいと思いました。

また、その愛とあわれみが原動力となって、イエスならきっとこうなさるだろうと思われることをしたいと思いました。

こんなふうにはどうすればよいでしょう。

みことばを読んで、イエスが地上におられたときどんなお方であったかを知ること、そして、すべてのクリスチャンにイエスが何を望んでおられるかを知ることです。

また、祈りの中でイエスを知りたいと願い求めること、そしてイエスを知る人たちと交わることです。

キリストをさらに深く知ると、私たちの喜びが増します。

クリスチャンが味わう喜びは、私たちの心や生き方がキリストのみこころに沿っている度合いに比例するからです。

パウロの願いを次のようにまとめて言うことができるでしょう。

パウロは、自分が愛している主とできるだけ同じようになりたいと願いました。

これは、神の子となったすべての人に対する主のみこころです。

パウロは、キリストとの関係性について、また、自分がキリストに似た者とされている度合いについて、聖なる不満を持っていました。

私たちはどうでしょう。

私たちは現状で満足してしまっていないでしょうか。それとも、パウロのように聖なる不満を持っているでしょうか。

このメッセージを準備しながら、私自身、聖霊にこのことを示されました。私は、今のイエスとの関係に満足

しすぎていました。

現状に満足して、イエスとの関係よりもイエスのための働きを優先させてしまいます。

日常の忙しさにかまけて、いとも簡単に聖なる不満を失ってしまうのです。それは、牧師でも牧師でない人も変わりありません。

もっと祈ってみことばに思いを巡らす時間を取って主をさらに知る必要があります。

主に導かれましたら、私のことを覚えて、このことをお祈りいただけると感謝です。

アリストア牧師も皆さんに祈ってもらうのを望んでおられると思います。アリストア牧師がイエスとの関係において聖なる不満を持ち続けるために主が助けてくださるように、と祈りましょう。

では、どのようなかたちで私たちがイエスをもっとよく知り、もっとイエスのようになる必要があるのか、見ていきましょう。

B. 「キリストの復活の力を知りたいのです。」

パウロがもっと知りたいとまず語るのは、キリストの復活の力です。

パウロは、ただクリスチャンになって、ノンクリスチャンとあまり変わりのない生き方をするのでは満足しませんでした。

パウロは、イエスを死から復活させた力を本当の意味で知り、体験したいと願いました。そして、自分の人生と他の人たちの人生におけるこの力の可能性を知りたいと思いました。

彼は、すべてのクリスチャンにこれを体験してほしいと願いました。

エペソ1章で、パウロはエペソのクリスチャンのために祈っていると語りました。

その祈りの内容は次のとおりです。

¹⁸ あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、… 神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように[祈っています]。²⁰ 神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ[ました]。

パウロは、神が彼らの心の目を開いてくださり、他に比べるもののない神の偉大な力を知ることができるようにと願いました。

この力とは、神がキリストを死からよみがえらされた時にキリストのうちに働かせられた力です。

パウロは、自分自身に望んだことと同じことを、自らがキリストに導いた人たちに望みました。

つまり、日常生活の中で、キリストの復活の力が彼らのうちに働き、また彼らをとおして働くことです。

そんな力が与えられていることを知らないクリスチャンも実際にいます。それで、自分たちの弱い力でクリスチャン人生を生きようともがきます。

だからこそ、パウロは神が私たちの心の目を開いて、与えられた力を知ることができるようにと祈ったのです。

パウロ自身、神に召された人生を生き抜くにはこの力が必要だと悟っていました。ですから、今日の聖書箇所にあるとおり、彼のうちに働くキリストの復活の力を知り、体験したいと願ったのです。

私たちはどうでしょう。あなたはそんなふうに祈ったことがありますか。

心の目がはっきり見えるようになって、私のうちに働く主の復活の力を体験することができますようにと主に祈ったことがありますか。

もしかすると、「そんなふうにずっと祈っているけれど、神は応えてくださらない」と思っている人がいるかもしれません。

私に言えることはただ、続けて祈ってください、ということだけです。この力の源がすでにうちに与えられていることを心から信じられるように信仰を与えてくださいと神に祈ってください。

この力は、神が外側から私たちに注がれるようなものだと思っはけません。
クリスチャンには、すでに主の力がうちに働いています。イエスご自身がうちに生きておられるからです。
信仰によって、イエスがうちに生きておられるという事実をしっかり受け入れましょう。パウロはガラテヤ2:20
でこう記しました。

キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のために
ご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

一日を始める前に主とともに過ごし、この一日を忠実に歩めるよう助けてくださいと祈りましょう。
また、その日乗り切るために必要な力、復活の力と主のご栄光を祈り求めましょう。

C. 「キリストの苦しみにあずかることも知りたいのです。」

ピリピ3:10で、パウロは「キリストの苦しみにあずかることも知りたいのです」と語ります。

この箇所について、パウロがキリストと福音のために苦しむことを願っていると解釈する人もいます。
しかし、ピリピ3:10でパウロが言っているのはそういうことではないと思います。
というのも、パウロはキリストの苦しみにあずかりたいと言っているのであって、キリストのために苦しむとは言
っていません。
パウロが言っているのは、キリストとともに苦しむということです。

その解釈が正しければ、「イエスは今どんなふうで苦しんでおられるのか」と考える必要があります。
この内容をしっかり学ぶにはそれだけで一回のメッセージを語らなければなりません、今は次のようなこ
とを考えるだけに留めておきましょう。

イエスは、今世界中で起こっていることをご覧になって、どんなふう感じておられるでしょうか。

ボコ・ハラムが、2年前にナイジェリアで拉致したクリスチャンの少女たちに自爆テロを強要していることを主
はどう思っておられるでしょう。
イラクやシリアでISの戦闘員たちが十代やもっと幼い少女たちを性奴隷として売買していることはどうでしょ
う。

クリスチャンだというだけで暴力を振るわれ、強姦され、拘束され、首を切られているのをイエスはどんな思
いでご覧になっているでしょう。

エイズ孤児や親に捨てられたり虐待を受けたりした子どもたちの苦しみを ご覧になってどう感じておられる
でしょう。

無数の人々のたましいが、希望も救いもなく生きて死んでいく様子をご覧になってどう思われるでしょう。

他にも例は尽きませんが、私の言おうとしていることがもうお分かりいただけたと思います。

すべてのクリスチャンが考えなければならないことは、この世にこれほどの苦しみがあり、そのことで主が心
を痛めておられる今、私たちは主の苦しみにあずかっているかということです。
私たちは、周囲にいる苦しんでいる人たちのことを心に留めているでしょうか。自分の必要や悩み、娯楽や
所有物など自分のことだけで精いっぱいになっていないでしょうか。

私たちの周りには、傷ついた人たち、助けの必要な人たちがたくさんいます。家族の中にも、学校や職場、
そして教会にもいます。
かつては完ぺきだったご自身の世界に罪をご覧になり、イエスの心は、悲しみや痛み、聖なる怒り、そして
あわれみに満たされています。

罪にまみれたこの世界に来て、十字架上でいのちをささげられたのは、このためです。

イエスの思いを完全に理解して共感することはできません。
けれども、キリストの苦しみにあずかりたいと心から願うなら、少しは共感できるはずです。

ほとんどのクリスチャンにとって、キリストとその復活の力を知ることができるようにと祈るのは簡単です。
けれども、キリストの苦しみにあずかりたいと祈るのは、難しいです。

こう祈り、願うことには犠牲が伴います。キリストの苦しみにあずかると、イエスの手となり足となりたいと思うようになるからです。そして、主が心をとめられるニーズを満たすためにあらゆる犠牲を払うことになるからです。

けれども、報いとして受けるものは払った犠牲以上に大きいのです。

私たちもパウロのように生きて愛を実践するために、神が恵みと信仰と愛を与えてくださいますように。
そして、神が私たちに聖なる不満を持たせてくださいますように。もっとイエスのようになりたい、キリストの苦しみにあずかりたい、と思わせてくださいますように、

D. 「キリストの死と同じ状態になりたいのです。」

10節で、パウロは次に「キリストの死と同じ状態になりたい」と語りました。
これは、イエスがなされたようにこの世の罪のために十字架上で死にたいということでしょうか。
もちろん違います。

「同じ状態になる」と訳された言葉は、「自分自身の経験により、内面的にある人と同じようになること」を意味します。

パウロは2章ですでに記した事柄について語っているのだと思います。
では、皆さんもよくご存じの2章の5-8節を読みましょう。

⁵ あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。⁶ キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられぬとは考えず、⁷ ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、⁸ 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。

3章でパウロが言っていることが分かりましたか。

「キリストの死と同じ状態になる」とは、他の人に謙虚に仕えるしもべとなってイエスの謙虚さを真似したいということです。

主に従うことが信仰のために死ぬことであってもです。実際、ピリピへの手紙を記した5-10年後に、パウロは殉教しました。

パウロにとって、キリストの死と同じ状態になるとは、己に死に、無私無欲なしもべの人生を生きることでした。

これは、イエスがルカ9:23でおっしゃったことだと思います。

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」

自分を捨て、日々、自分本位な願いや計画に死んでイエスについていくのです。
つまり、イエスに従うこと、そして、神に助けをいただいてイエスのようになること、これこそ、すべての弟子た

ちが主に召された生き方です。

私たちはいかがでしょう。

生活やイエスとの関係において現状に満足してしまっているでしょうか。

それとも、聖なる不満を持っている、または持ちたいと思っているでしょうか。キリストの死と同じ状態になるために、へりくだって日々自分に死ぬよう、聖なる不満によって促されていますか。

E. 「死者の中からの復活に達したいのです。」

パウロは11節で、キリストを知りたい理由、キリストの復活の力とキリストの苦しみにあずかりたい理由、そしてキリストの死と同じ状態になりたい理由とを一言でまとめます。

それは、死者の中からの復活に達することができるため、でした。

「死者の中から復活に達する」という表現は、パウロがコリント第一15章とテサロニケ第一4章で記した内容を指します。

今朝はその個所を詳しく見る時間はありませんが、簡単に言うと、クリスチャンが死ぬと、私たちの本質部分であるたましいは、主のおられるところに行く、という聖書の教えです。

1章23節でも、死んでキリストとともにいたいとパウロは記していました。

また、コリント第一15章50、52-53節では次のように語りました。

血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。… 私たちは変えられるのです。朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。

ですから、ピリピ3:11でパウロが言及しているのは、永遠のいのち自体についてではありません。というのも、私たちはキリストを信じた瞬間に永遠のいのちを受けるからです。

ここでパウロが言いたいのは、キリストを信じて死んだ人々と、キリストの再臨のときに生きている人たちとに主が新しい栄光の体を与えてくださるときのことです。

パウロはその10節後のピリピ3:20-21でこう語ります。

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

クリスチャンにとって、私たちの永遠の住まいは天国のどこかではありません。

私たちの永遠の住まいについては、聖書の最後の書、黙示録21章に記されています。

この20-21節でパウロが語る 때가来る前に私たちが死んだなら、聖書が教えるとおりに、私たちは天国に行きます。

しかし、これほど熱心にキリストを知り、キリストのために生きようとするのは、死んだときに体から離れた霊のかたちで永遠を天国で過ごしたいからではない、とパウロは協調します。

彼の究極の望みは、新しい地で復活した栄光のからだをいただいて、愛と恵みにみちた救い主と永遠を過ごすことです。

このテーマについては、来週、ケビン・シェパード牧師が20-21節から語ってくれます。

結論

福音の中心には、キリストの苦しみと死と復活があります。

しかし、キリストを知るとの特権は、キリストの苦しみと死と復活を歴史上の出来事として知る以上のことです。

むしろ、イエスの苦しみと死と復活を、私たちの日常生活の活力と認識することです。

イエス・キリストを知ることの意味は、イエスとの親密で人生を変えられる関係によって、イエスと同じような者になることです。主の復活の力を体験し、喜んで主の苦しみにあずかるなら、主との絆は喜びに満ちます。

キリストとの交わりには、このお方と過ごす栄光に満ちた永遠というクライマックスが待っています。これは、私たちの想像以上に素晴らしいものです。

最後に、私たちが次の問いを真摯に受け止めてその答えについて考えることを、主はお望みだと思いません。

「私は、聖なる不満を持っているのでしょうか。あるいは、今のままで満足しているのでしょうか。」

まだクリスチャンではない人は、次のことを考えてみてください。

「私は、今キリストとの関係がない現状で満足しているのでしょうか。」

もし聖なる不満を持っていないなら、それを換えようと思いませんか。ここにいるひとりひとりが、イエスと面と向かって顔を合わせるその日まで、聖なる不満を持って生きていきますようにと祈ります。

では、最後に祈る前に、「主よ、あなたをもっと知りたい」を賛美しましょう。

.....

祈りましょう。

主よ、あなたとの関係において現状維持で満足していることをお赦してください。

私たちがいつも聖なる不満をもっていられるように、あなたをもっと深く知ることを求め続けられるようにどうか助けてください。

あなたの復活の力を日常の中で感じられるように、また、あなたの苦しみと死と復活を知ることができるように助けてください。

主よ、私たちもいつの日か、復活に達したいと思えます。

あなたと顔を顔を合わせるその日まで、私たちひとりひとりが聖なる不満を持って生きていけるように力を与えてください。

イエスの御名によって祈ります。

希望の神が信仰における喜びと平安で満たしてくださいますように。私たちが聖霊の力によって希望にあふれますように。